井上圓了の竹田中学校講話について

明治四十年五月十六日

茅野良男 *kayano yoshio*

*

明治四十〔一九〇八〕年五月十六日（木）午前、井上圓了〔以下、円了〕は大分県立竹田中学校で講話を行った。以下、井上円了『新編全国巡講日誌　大分県編』(1)を参照し、右の講話を中心に、当時の大分県直入（なおいり）郡竹田（たけた）町とその周辺の数ヶ所で行われた講話・講演について、その文化的背景を探って見たい。

この講話そのものの筆記は、同校の校友会「修道会」発行の『修道会雑誌』(2)第四号（明治四十一年三月五日）に、「井上博士講話筆記」の題目で冒頭の「論叢学林」欄の最初に五頁に亘り掲載されている。この欄は他に客員二・会友一・生徒五の論稿を含む。筆記者は五年生で前年以来文芸部員の三宅直太郎である。三宅はこの欄に四頁の「立志論」を寄稿し、第三号にも三頁の「常識」を掲げている。三宅は竹田中学校の七回生（明治四十一年）に当り、卒業後は慶應義塾大学部に進んだ。

この講話の印刷原文は一頁49字17行一段組みの四頁分に相当する。繰り返しや冗長な部分は刈り込んだ上での筆記記録であると思われる。この記録は本誌の編集当事者によってできるだけ通行字体（仮名づかいは原文のまま）に改められた上でここに収められた。感謝したい。

竹田中学校は明治三十［一八九七］年四月一日、大分県大分尋常中学校竹田分校として創立され、明治三十二年四月二十七日の新校舎落成式を経て、明治三十三年四月一日、大分県竹田尋常中学校として独立した。翌三十四年九月一日から大分県立竹田中学校と改称、昭和二十三［一九四八］年四月一日、他の県立二校と共に大分県立竹田高等学校に統合された。

平成九年九月二十四日、創立百周年記念式が催された。筆者は出席出来なかったが当日配布の校報記念号に小文(3)を依頼された。筆者の在学は昭和十二年から十六年三月の四年修了までである。竹田に偶々帰省中の依頼であり、資料として、『修道会雑誌』第一号（明治三十七年三月二十二日）から第四十二号（昭和十六年四月十日）までの内、残存する三十五冊を短期間借用し、初めてその全体に目を通した。ここに紹介する「井上博士講話筆記」は、右のような事情で昨年の夏、竹田の茅屋の書庫で『修道会雑誌』を調べる間に目にとまったものの一つである。同年秋、井上円了記念学術センターの三浦節夫氏にコピー類を提供し、その結果、このたび解説を依頼された次第である。

＊＊

大友宗麟の後、豊後一円と豊前の一部は小藩に分割された。直入郡と大野郡との大部分・南海部郡の一部分を含む旧中川藩〔居城地の旧称から岡藩とも呼ばれる〕は、豊前の中津藩に次ぐ七万四千石の外様である。治政後半期は譜代からの養子が多く、豊後では一番の禄高であった。儒学者では唐橋君山（一七三六～一八〇〇）・角田九華（一七八三～一八五五）、国学者では清原雄風〔森伯高〕（一七四三～一八一六）、画家で田能村竹田（一七七七～一八三五）、真宗大谷派の雲華講師（一七八三～一八五〇）等が知名の士である。明治三十七年三月二十六日旅順港口で戦死の廣瀬武夫は竹田町茶屋の辻の生れ（一八六八）である。瀧廉太郎は父が直入郡長で竹田高等小学校を

明治二十七年に卒業した。朝倉文夫は竹田中学校の二回生（明治三十六年）である。

このような土地柄のため、明治十八年創立の大分、明治二十七年右分校のち独立の中津、これら先進校に続こうとする動きが、明治二十年代前半から直入・大野地方に起っている。この運動が杵築（きつき）、臼杵また宇佐の各地を刺激し、明治三十年四つの分校設置となり、三年後に六つの尋常中学校併立となった。円了が講演に訪れた明治四十年五月十六日は、三月二十五日に三十一名の第六回生を卒業させ、二十八・九日の試験で六十二名の新入生を受け入れた新学年のことであった。

図らずもこの明治四十年は竹田中学校の創立十周年に当る。校長は初代杉山敦麿、二代高柳猛虎を経て三代目の原安馬である。『修道会雑誌』は高柳校長の時に計画され、原校長着任直前（明治三十七年三月二十二日）に創刊された。第一号の表紙図案は竹田町の天狗山で、朝倉文夫の作である。第二号（明治三十八年十二月二十五日）から第十六号（大正三年七月十日）までが原校長時代の発行となる。

原安馬は県下鶴崎の出身で大分師範学校、東京高等師範学校を卒業、京都師範学校教諭から校長兼教諭として来任、創業守旧の交替と六中学併立との難局に対処する。将来を見越して最初から学校林の経営を企て、地方有志および卒業生との連繋を密にし、『修道会雑誌』にも再三寄稿、教員の交替の補完に目を配る。

明治三十九年三月には地元有志の寄附により寄宿舎〔報国寮〕と付属施設を校内に設け、四月からは学林会の基盤・組織の充実を図る。その中で迎える十周年記念は式典は簡素とし、雑誌も特集号は出さなかった。力点を学林に注いだことの恩恵は、九十周年記念の年（一九八七）の頃にまで及ぶと言い得る。

『修道会雑誌』第四号の「校記会録」から「〔明治〕四十年記事」を摘記しよう。「紀念（ママ）式　四月二十七日創立満十ヶ年紀念式を挙行し式後運動会を開く　盛会なりき」。三宅直太郎の詳細な運動会記事が別の所に三頁ある。

続いて、「井上博士来校　兼ねて九州漫遊中なりし井上博士は鹿児島宮崎を経て竹田に来られ五月十六日本校講堂にて一場の講話ありき。（筆記別項）」とある。

この中の講堂とは、剣道場兼用の控室でもなければ、柔道・体育用の修道館でもない。二棟の校舎中、正面の本校舎の二階部分である。落成祝の公開時には床一杯に模様入りの布を敷きつめ、両側の壁添いに各流派の生花を飾りつけ、生徒の目に「百畳敷の大広間」とも感じられたという回想もある(4)。学級増のため百十一坪の講堂が大正十三年一月に本校舎の右前に建つまでは、この講堂か控室かで儀式は催された。

＊＊＊

ところで、この年の二月二日から沖縄の巡回講演が始まる。二月十八日鹿児島に到着、三月二十三日に宮崎県入りし、五月七日、延岡から船で大分県の佐伯（さいき）に向う。大分県では五月八日から六月二十一日まで四十五日間、四十八ヶ所で百席の講演を行った。一ヶ所で二席の場合、十分ほどの休憩を挟み、前後それぞれ一時間程度違った題目で話す。演題は甲乙両種で各二十題、二題選択の場合は甲種より必ず一題選ぶと定め、前以て題目を打ち合せておく。演説の前後、希望者には揮毫に応じている。

円了の巡回講演は明治二十年代からであり、当初は哲学館の維持強化のためであった。学校経営から退いて以後は、修身協会のち国民道徳普及会の理念を、積極的に哲学館出身者の連絡網を介して、内地のみならず台湾や関東州に至るまで広く各地で講演し揮毫し、この巡講の途上そのもので講演中に倒れ、数時間後、永眠したのである(5)。

五月八日から十二日までの間に当時の佐伯町、臼杵町、大野郡の三重町、牧口村で五ヶ所十席の講演を終えた円了は、五月十三日（月）の早朝、牧口村を発って竹田町に向う。なお五月八日から四十五日間に雨は五日、曇

が一日である。序でながらこの明治四十年、汽車は宇佐郡長洲（ながす）駅までの南下に留まり、大分・別府間に私営の電車が走るだけで、交通は人力車、通っている所で箱馬車、船、川舟、または馬しか利用出来なかった。

予定に従う巡講の完遂には、各県ごとの哲学館出身者の連絡網とそれを束ねて本部と交渉に当る者との協力体制が不可欠である。この四十五日間に記録されている哲学館出身者二十三名は、県下各地の有志・理解者を動かして会場・宿舎・日程・交通等を予定する、その口切となったのではなかろうか。円了に同行して世話する随行者も哲学館出身である。大分県では五月十日から荷堂弦、二十日から藤村僧翼の二人が当っている(6)。前者は松崎覚本と共に当時大分中学校に勤務、後者は当時の岡本村〔現竹田市〕源勝寺の住職であった。

竹田中学校が原校長着任以来、学林の経営実現に力を注ぐ方針は前に述べた。今私が追跡している『修道会雑誌』第四号の学林会関係記事にこの藤村住職が登場する。藤村僧翼住職は兼ねてよりこの方針に賛同、杉苗の寄附を申し出られ、これにより五千本を移植したが、「時已に晩春好天相続きて土地乾燥したりしを以て過半枯死せしは遺憾と云はざるべからず」。これは文脈と寄附者名簿から見て四十年春を指すかも知れない。同住職が哲学館出身であることは、円了の竹田巡講の最初の日、牧口村から竹田町への「途中、哲学館出身藤村僧翼氏の出でて迎うるに会す」の日誌の一節で初めて知った。併せて円了の竹田中学校講話との或る因縁を感じたので記す次第である。

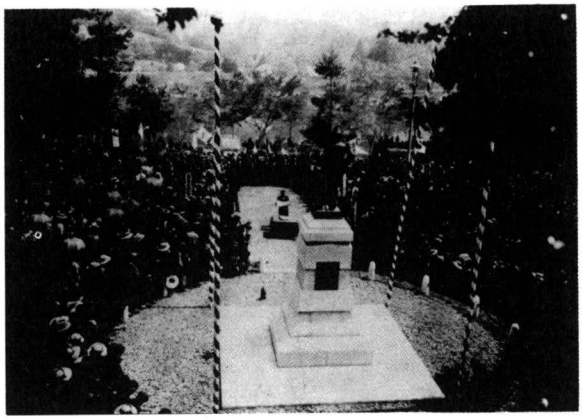
＊＊＊＊

円了が竹田町へ向う五月十三日（月）は、故廣瀬中佐の銅像除幕式が竹田町の隣り玉来町（たまらい）拝田原（はいたばる）の山下公園で行われる日であった。午後の式に参列のため早朝牧口村を出たが、七つのトンネルを抜けて竹田までの道は人の群れで一杯、竹田の町並みはとりわけ祝賀の山車も出て人力車も立ち往生、昼過ぎようやく玉来町の堀豊彦宅に

到着、一休みして除幕式に臨んでいる。

廣瀬中佐について『修道会雑誌』から二、三を引いておく。某職員の「旧日誌」では、「〔明治三十七年〕四月二十五日。廣瀬中佐の遺骨(マヽ)到着。校長職員及生徒一同濁淵(にごりふち)まで出迎を為す」。「五月一日、本校庭に於て〔竹田町による〕廣瀬中佐の追悼会を挙行す。大久保知事本校職員及生徒其他官民千余名来臨。非常の盛会なりき」。「五月十日。廣瀬中佐の勲章を講堂に於て各生徒に拝せさせらる」。

別の号では、明治三十九年の記事に「廣瀬中佐銅像　五月二十五日着竹したるに付校長以下職員生徒一同濁淵まで出迎へたり」とある。当時箱馬車の終点の岡本村濁淵から竹田町を通って山下公園へと銅像を移動させるには、竹田中学生が手を貸したか援助を頼まれたかであった。これは篠田〔河村〕頼の回想で分かる。「廣瀬中佐の銅像を曳いたり、報国寮で胆試しをしたり、野津原で一泊して徒歩で大分に行って、剣道の試合をした」(7)という昔話から、過去が片影として確実に蘇るのである。



除幕式（『写真集竹田』国書刊行会　昭和57年3月20日より）

竹田中学生に曳かれて山下公園に着いた銅像は、大分中学校六回生の渡辺長男の作である。渡辺は前述の朝倉文夫の兄である。戦争中の供出で今日は見る事が出来ない(8)。ただ、問題にしている第四号の表紙図案はこの銅像であり、三年生阿南国会の作品である。当日午後の除幕式に参列した円了は式の有様を「林も谷も人で埋もれ満山黒し」と形容する。「この日参集せるもの、おおよそ三万人と称す。竹田町空前の群聚なり」。

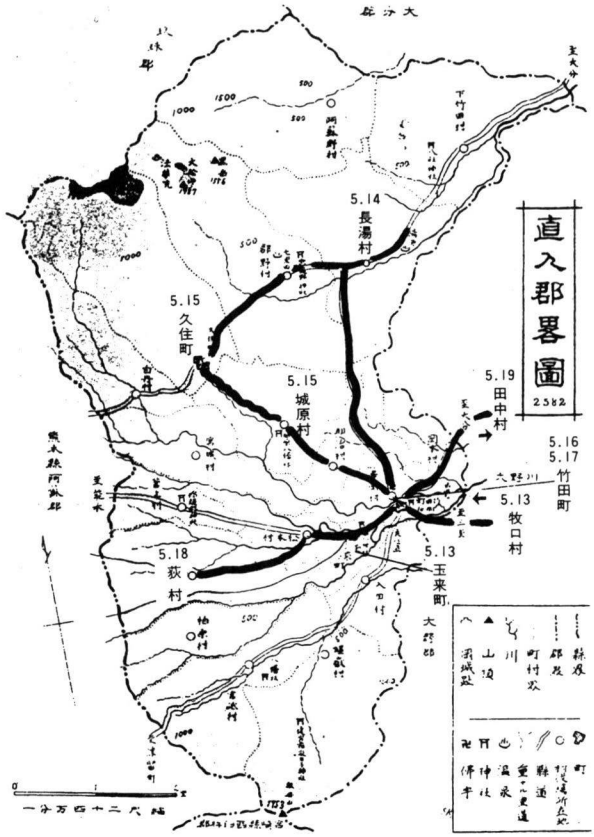
竹田中学校の職員生徒も参列したが、それは前述の「四十年記事」には出ていない。しかし当時の生徒の日記の引用で明白である。「〔五月十三日〕。廣瀬中佐銅像除幕式（註・母校生徒参列、全町村をあげての世紀の大祭典、数日にわたり、ビ文レイ筆?をふるって、ことこまやかに記述）」(9) とある。これは五年生菊池仁齢の「五十年前の日記」からの一節である。

五月十四日（火）、午前、堀氏宅にて直入郡教育会長黒川文哲の来訪に応待の後、午後は長湯村の高等小学校で二席、十五日は午前を久住村の小学校で二席、午後を城原（きばる）村の小学校で二席、城原は盛会であった。竹田からの黒川氏と会い、夜、竹田町に着く。

＊＊＊＊＊

第４号（明治41年３月５日）表紙

五月十六日（木）は午前竹田中学校で講話一席、午後劇場洗心館で演説二席である。大分県下の開会一覧表によれば、午前は一席五百名、午後は十七日の午後の二席と併せて四席各八百名である。前者は主催が中学校、後者は町内有志である。長湯村・久住村・城原村は各四百・各三百・各五百人で、主催はすべて村内有志である。なお、県下での学校主催は、大分町の師範学校が一席三百人、大分中学校が二席各四百人、高等女学校が一席五百人（日曜日）、杵築町が中学校で一席三百人（会場は寺院）である。



直入郡略図（『直入郡志』大正12年12月20日による　一部修正）

竹田中学校の講話の場合、一覧表では会場が中学校および高等小学〔校〕となっている事が目を惹く。しかし一席で五百人であり、主催は中学校である。私は前述の「四十年記事」に基づき、中学校の講堂で一時間ほどの講話が行われたと解する。明治四十年四月現在、竹田中学校の職員十九名、生徒数二百四十名〔一・二年は二学級、三〜五年は一学級〕という数字を挙げよう(10)。他方、竹田高等小学校の最上級生は四年制度の最終学年で、翌四十一年男女合計百四十一名の卒業となる(11)。その下は、明治四十二年竹田尋常高等小学校尋常科（六年制）を男女合計七十九名の卒業である(12)。

このように、一覧表の人数を概数と見ても、中学生の全員と高等小学校の残存学年とで職員を入れて五百名足らずと見てよい。もし高等小学校の名前と制度に拘るなら、最終学年生だけを加えて一席四百名がほぼ実数とな

るであろう。幸い竹田高等小学校の永い歴史を持つ『小学同窓月報』は其後も続いている(13)。今度竹田に帰省の折、右の推察を『小学同窓月報』に当って調べ直して見たいと思う。

ところで講話の内容であるが、高等小学生をも聴衆にする為でもあろうか、まことに平明であり、特に指摘する点は無いと思われる。実際、「蓮根街」と自称し円了が「蜂窩街」と名付ける土地柄に生れ育つ者にとっては、その外に出て、これまで未経験の風俗・習慣・信仰・思想に接触・対峙する事により、見る目を養い、取る手を鍛えるのでない限り、住み馴れた風土の文化と人情の真価も見えないであろう。円了の竹田論は即ち日本論の趣きがあると言える。この講話には論題が無いが、円了の甲種演題で言えば「精神修養法」「公徳養成法」または「青年の心得」の範囲のものである。仏教・宗教の教理の一端に触れたものではない。

右の点で、前に触れた菊池仁齢の所感ないし考えが参考になる。菊池は父が竹田町の真宗大谷派福田寺の住職で、竹田尋常小学校を明治三十二年に卒業、竹田高等小学校を二年で父に伴い、福岡県に移住、久留米の明善中学校に入学、四年の学年試験を終えて明治四十年四月、竹田中学校に転校した。前の引用はこの四月からの日記の一節である。文筆の才に恵まれ、『修道会雑誌』に、また前述の『小学同窓月報』および後身の『竹田小学同窓月報』に筆端を披瀝している。

ここでは井上円了の講話の影響ないし所感の一端と思われるものを何点か挙げよう。一番早いのは「講話筆記」と同じ第四号掲載の「硯滴」である。「理学博士山川健次郎氏は、英語のゼンツルマンを訳して、士君子と言ふ、蓋し、之を紳士と訳するは、大にゼンツルマンの真相を誤れりと言ふにあり」。「英国人の所謂、グレートマン、ゼンツルマンは、恰も、吾国の君子にして、其のカレーヂ即ち勇気は、吾が武士道位に、重き思慮をおけり、されど、日本人の紳士は、……ハイカラ式の、虚栄者流の人物を指し示せば、事実全く錯誤せるなり」。「山

川博士と、井上円了博士とは、其の演説振り、其の手真似振り、殆んど同人の感あり」。この「硯滴」は「多くは昨秋ものせし日記の片録なり」とあり且つ末尾に（十月二十八日記）とある。印刷は明治四十一年三月である。山川健次郎の講演は明善中学校時代の聴講であろうが、井上円了との外面的対比だけでも転校後五月の講話の印象なしには不可能であるであろう。ただ、それだけでは山川の説く士君子は分っても井上の説く理想は分らない。果して菊池はそうした事柄を把握し得たのであろうか。

＊＊＊＊＊＊

前にその一節を引いた「五十年前の日記から」の中で注目すべき箇所を幾つか挙げよう。まず、「〔五月十七日〕井上博士の講演あり、公徳修養法・仏教の宇宙観・人生論なりしが、宗教の意義・仏教とは如何、宗教と教育とは相むすばるるべきもの、決してはなるべきものにあらずといふところにおよんで、おもはずカッサイせんとせり」。これには後で触れよう。

「〔七月九日〕……この頃の西洋史（註・有賀博士の教科書）は、ベルリン会議のところ。ビスマルク、ゴルチャコフ、その他の面々、死力をつくしての大活動、おもしろくてたまらず」。「〔七月二十三日〕東京高等師範学校の那珂博士来校、日本歴史は信ずるに足らず、その愛国心をその歴史により養はんとするは不当なりといふ（註・大にフンゲキして、他日勉強し、この説を論破するとイキまいている）」。

まず、井上博士の講演を五月十七日とすること、内容を公徳修養法・仏教の宇宙観・人生論とすること、ここから考えよう。日記の引用だけで菊池が前日の講話を聴かなかったとは断定出来ない。察するに、十六日の内容が竹田の中学生・高等小学校に対する「公徳養成法」であるとすれば、菊池は積極的に同じ日か十七日の午後、洗心館の二席を聴講したのではあるまいか。

午後の主催は一覧表では町内有志であるが、円了によれば直入郡教育衛生会と竹田の各宗同盟会との発起による。前者は教育と衛生の普及を説き改善改良を謀る明治二十二年以来の組織で、前出の黒川文哲が初代会長であった。後者の世話役は満徳寺（真宗大谷派）・円福寺（法華宗本門流）・正覚寺（浄土宗）等である。発起者の相違で参集者に対する午後の講演内容が違っていたと思われる。十七日の講演内容が「公徳修養法・仏教の宇宙観・人生論」であったとする菊池の日記の背景の一端を、右のように推定して見たい。何故に十七日も聴講したのであるか。十六日の講話では井上円了の目指す所が判然としないからであるのか。菊池の竹田の住所は前述の福田寺である。

それを解く鍵の一半は先程の五月十七日の日記に潜む。別の形でやはり前に引いた「硯滴」に存する。但し直接に円了を名指すものではない。「日本人は、大陸的思想を有せず、島帝国々民は、大陸的進取の気慨を具へず、規模狭少、箱庭的の区々たる小民に過ぎずと称ふる外人あり。否、自ら嘲りて、快しとなす変人あり」。たしかに「日本国の地勢を案ずるに、……到底、大陸の比に非ずと思はるれど、必ずしも杞憂するに及ばず」。端的に言えば次のような理由からである。「吾人をして、忌憚なく之を言はしむれば、日本は大ならざれ共、雑ならず、小なれ共、秩序あり。」

日本の国土に応じた秩序と美の自覚の為には精神の狭量と知性の怠惰とは矯正され止揚されなければならぬ。フランクリン、王安石、新井白石、「彼等が、巧妙なる手腕を以て国家を経綸せし事蹟を憶はば、歴史が吾人に与ふる教訓は、蓋し少からざるを覚えむ」。このように「硯滴」の菊池仁齢は、円了に対してのみならず、一学期中の講話・講演等に対する自己の見解を右のような所感の形で述べていると言える。ここには、円了の講話と那珂の講話への反応と解し得るものを摘記した。

では、円了の「仏教の宇宙観・人生論」に対する反応はどうか。「宗教と教育とは相むすばるるべきもの、決してはなるべきものにあらず」。これへの共感は既に紹介した。けれども、この種の共感は、この時が初めてではない。山川博士と井上博士との演説振り・手真似振りは殆んど同人の感ありと「硯滴」で述べていた。その次の一節はこの当時の菊池の理想を洩らす点で重要な所感である。

菊池は雲照律師（一八二七～一九〇九）の講話で聴いたと告げる。「吾が信仰する所は二三千年前、少くとも、六百年前にあり、ソレ以後は相手にならず」。「教育の裡面は宗教なり、教育と宗教とは、一体にして、離る可からず」、と。これは転校以前の体験であろう。「師は、兎に角不凡の人なり。余等の敬虔すべき人なり。夫れ人、人間以上の事業を成さむとすれば、先づ宜しく師に傚へ、吾人は、師の尊き人格に接して、恰も、神仏の前に跪けるが如き心地したり、師の如きは、蓋し稀なり」。

それ故、菊池の論述から竹田での円了の大人相手の講演内容とそれへの態度は判明しない。けれども、円了の講話に対する菊池の反応は以上のように複雑である。円了は中学校での講話を、「当竹田には軍人の方面には廣瀬中佐を出したがこの先き各方面に中佐を出すため将来の方針を立て一生の紀念を残すため永遠の計を定めて勉強ありたい」と結んだ。これを受けるかのように菊池も第五号の「机の塵」で言う。「竹田には、田能村竹田が出た、廣瀬中佐が生れた、軍神の銅像がある、とお互に自慢をしている」。「それだけでは不充分である。故人に私淑して、其の精霊を享けねばならぬ。精霊を享けて、少くとも模倣位はせねばならぬ。だから、ただ山下〔公園〕に軍神の銅像ありだけではいかない。拝して、視て、感じて、自然に中佐の英霊をもらふべきである」。菊池は菊池なりに、井上円了の「忍耐と勉強」の呼び掛けに呼応して後輩に説いていると言うべきであろう。

高等小学校二年で竹田を去り中学五年生一年を竹田で過した菊池は、第五高等学校を経て東京帝国大学文科大

学で国史学を専攻、大阪朝日新聞社、大阪毎日新聞社の記者として活躍した。竹田では、竹田中学校の『修道会雑誌』への二十編余りの寄稿、竹田高等小学校から竹田尋常高等小学校にかけての『〔竹田〕小学同窓月報』への実名・筆名の夥しい寄稿で知られている。筆者は昭和二十年代中頃、竹田で何度かお逢い出来ただけである。竹田近代の生んだ文筆家の面目に最近ようやく相見えたの想いである。これも井上円了との因縁による訳である。

＊＊＊＊＊＊＊

五月十八日（土）は黒川文哲と共に荻村に赴く。小学校で二席講演。途上で詩作。また文哲の詩に次韻して一首を贈る。途上の作を読もう。

林巒起伏して路腹の如く
夏浅くして山田の麦未だ黄ばまず
今日法輪何処にか転ず
尋ね来ぬ祖母岳陰の郷

ただ、蓮根街と蜂窩街の竹田町からは、荻村は高原の村と見えても祖母の岳麓とは見えない。しかし、藍色と鉄紺の間の山色の祖母の巒壑を遠景にするなら、多少の起伏も間隔もたしかにその陰に呑み込まれてしまうのである。

黒川文哲（一八四八～一九一六）は岡の藩医の家に生れ、竹田地方の医師界のみならず教育・文化界への多大の貢献で知られる。その家系は今日も竹田の医師界文化界に寄与する人を送り出している。

五月十九日（日）、竹田町を出発、大野郡田中村へ向う。こうして円了は竹田地方(14)の巡講を終えた。明治四

十年の晩春から初夏の六泊七日、六ヶ所十三席の旅は、再び大野郡に入り、大分地方から別府地方、国東半島へと北上する。六月十九日（水）、国東半島の田原村から六里を人力車で宇佐郡長洲村に着く。「鹿児島以来三ヶ月を経てはじめて汽車の笛声を聞く」とある。

なお、途中五月三十日（木）、別府の浜脇町の弦月館で演説の後、哲学館大学同窓会に出身者十九名が集った。今回の大分県巡講の斡旋役はその中の先輩大友芳虔である。四十五日間に名前の挙った出身者で欠席の者は四名だけであった。六月二十一日（土）で巡講を終え、翌二十二日に長洲駅発、随行の藤村僧翼も同車、下関を経、二十四日朝七時半に新橋に着いた。明治の人の強靱さに頭が下がる。

豊後と豊前の一部を含む大分県下の巡講は、この明治四十年が大半を占める。また明治二十五年と二十六年の九州巡回、さらに明治四十一年の福岡県巡講に際し、日田地方と中津地方とを回っている。（一九九八・三・一三）

【注】

（1）井上円了『新編全国巡講日誌　大分県編』東洋大学井上円了記念学術センター編・一九九五年三月三十一日。全七二頁。この中の二十六～五十一頁が明治四十年の巡講。日田地方・中津地方に対しては明治二十五年・四十一年の巡講記が右の前後にある。六十五～七十二頁の資料は巡回講演の目的・方策を知る上で大切。なお、一九九七年三月二十日の「福岡県編」中、明治二十六年の日田郡と中津市の分も大分県に属する。旧漢字は固有名詞と引用文では適宜残した。

（2）『修道会雑誌』大分県立竹田中学校修道会発行。引用される号の発行年月を掲げておく。引用時にはその号の頁数は省略する。

『修道会雑誌』第一号・明治三十七年三月二十二日。第二号・明治三十八年十二月二十五日。第三号・明治四十年一月二十日。第四号・明治四十一年三月五日。「井上博士講話筆記」は一～五頁。第五号・明治四十一年六月二十五日。

第十号・明治四十四年七月十五日。第二十号・大正五年四月二十三日。第三十九号・昭和十二年七月二十四日。なお竹田中学校第一回卒業は明治三十五年三月である。

(3) 茅野良男「竹田高等学校百年史落ち穂拾い」『竹田高等学校校報』創立百周年記念特集号・平成九年九月二十四日。第二面。

(4) 後藤静香「学窓の思い出」『星霜六十年』大分県立竹田高等学校・昭和三十三年三月五日、十〜十一頁。以下この六十周年誌からの引用も(2)と同様とする。後藤静香は二回生。後藤はまた、この講堂で後に文学博士南条文雄の講話を聴いたと報告している。

(5) 『東洋大学創立五十年史』東洋大学・昭和十二年十一月二十三日。五二二、五四三頁。

(6) (1)の「大分県編」二十七、三十二〜三頁。

(7) 前記(4)の六十周年誌二十八頁。篠田〔河村〕は明治四十三年卒業の九回生である。

(8) 『修道会雑誌』第十号の目次の次の写真銅版五葉の一つで見ることが出来る。

(9) (4)引用の六十周年誌二十三頁。この（ ）は菊池が五十年前の日記を見ながら要約ないし説明や所感を入れたもの。

(10) 元竹田高等学校事務長本田照昭氏より頂戴した「大分県立竹田中学校」による。感謝の意を表したい。

(11)(12) 共に、『楠』竹田小学校開校百二十周年記念誌・竹田市立竹田小学校、平成七年二月十一日、による。

(13) 右の『楠』所収の拙文「楠と同窓月報」八七〜八八頁参照。

(14) 岡藩・明治・大正の竹田地方の歴史と文化については、『直入郡志』直入郡教育会編纂、大正十二年十月二十日を参照。

【補注】

初校時に新しく参照出来た主要な資料は、井上円了記念学術センター編『東洋大学百年史』通史編Ⅰ・一九九三年九月二十日（以下、『百年史Ⅰ』）、『井上円了選集』第一二巻・一九九七年三月二十日（以下、『選集』一二巻）、阿部隆好編

『写真集竹田』国書刊行会・昭和五十七年三月二十日、岡の里事業実行委員会編『竹田の寺』竹田創生館・平成六年四月一日、である。これらによる補強が必要な〔注〕を番号順に〔補注〕として示す。従って〔補注〕の番号は連続しない。

(1) 『選集』一二巻では、巡回の大分県関係は明治二十六年一月と二月が現在の日田市と中津市（九一～九二、九三頁）。明治四十年の大分県紀行は三三六～三六三頁、内、竹田地方は三三八～三四二頁。明治四十一年は二月二十日から三月十二日まで現在の中津・宇佐・日田各市、宇佐・玖珠各郡（四三一～四四〇、四四二～三頁）である。円了の明治二十三～三十八年の全国巡回、退隠以後明治三十九～大正八年の内外の巡講の概要は、『百年史Ⅰ』三七三～四〇二、六九七～七一一頁。講演の演題は同七〇一～三頁。揮毫については三七二～三、三七八～九、七〇三頁。なお補注(5)をも参照。

(3) 初校直前、『修道会雑誌』に関する拙文が印刷された。茅野良男「修道会雑誌の果した役割――竹田の近代化と旧制竹田中学校――」・『からんころん』第25号・竹田市竹田創生館・一九九八年五月十五日、二～一三頁。これは本稿と共に、旧制竹田中学校の五十一年間、すなわち竹田高等学校の前半史の落ち穂拾いの心積である。

(5) 修身教会のちの国民道徳普及会については、『百年史Ⅰ』六八四～六九四、七〇〇～七〇三頁。巡講の方法・巡講地は七〇二～五頁。演題・揮毫については前補注(1)参照。大正八年六月五日夜、大連幼稚園での最後の講演と逝去に関しては、『百年史Ⅰ』七〇六～七一一頁を参照。本稿執筆の折には『創立五十年史』五二二、五四三頁の各末尾数行だけに拠っていた。

(6) 『選集』一二巻では三三九頁。

(8) 平成元年竹田地方の水害で失った『写真集竹田』を初校前に再入手し、山下公園の銅像の写真三枚に気がついた。中でも除幕式の写真は、背後の中川神社の丘から祖母山に南面する銅像を見下した珍しいものである。円了は地元玉来町の有志堀家の宿泊でもあり、銅像近くに参列しているものと想像出来る。この写真集を再入手するまでは、大切な除幕式のこの写真のことは全く忘失していた。市役所等の協力で竹田市民から提供された数多くの写真の中から、貴重なこの一枚を加えて選択された編者阿部隆好氏に御礼を申し上げる次第である。

(9) 本文七九頁の『修道会雑誌』第四号の表紙は、今年の春の連休で竹田に帰省中、竹田高等学校校長室で甲斐利夫氏に撮影を依頼した。何分にも九十年前の雑誌であり、印刷はネガから起こしてもらった訳である。撮影に関して現校

長久山征三氏、元校長倉原隆範氏、甲斐利夫氏に感謝したい。

(11)(12) 直入郡高等小学校同窓会が明治二十四年に発足、翌二十五年十月に『直入郡高等小学校同窓会雑誌』第一号を発刊、明治三十二年に『同窓会雑誌』と改題する。明治三十八年三月の第五十号から『小学同窓月報』となり、大正九年十一月から『竹田小学同窓月報』と改題、昭和十八年の五百五／六号まで続く。高等小学校から小学校へと連続して竹田地方近代の文化発信の役割を中学校の『修道会雑誌』と共に果して来た。帰省中に調べ直すと、残存の『小学同窓会報』は八十四号から四百八十号まで（途中に欠号あり）であって、明治四十一年以来のものである。よって廣瀬中佐の銅像および井上円了の講演の件は残存の『小学同窓会報』からは分らない。

(14) 本文八〇頁の「直入郡略図」は、元来、注(14)の大正十二年の『直入郡志』の扉の次頁に所収のものからである。円了の講話・講演した町村の表記は大正十二年現在のものである（久住が町になっている）。五月十三日の牧口村からの道、五月十九日の田中村への道を↓で示し、円了が通ったと思われる道を黒く塗って示した。さらにまた、本文八三頁の満徳寺、円福寺、正覚寺、八一、八三頁の福田寺については、補注資料の一つ、『竹田の寺』平成六年四月一日の九二～九九、一〇八～一一五、四六～五三、八六～九一頁それぞれの参照を願っておく。全国巡講については、新たに、三浦節夫「井上円了の全国巡講」『選集』一五巻・平成一〇年三月二〇日、四四三～四九九頁に詳しい。（一九九八・六・一二）